

# 海 (かいし) 市 No. 13

## ● 詩

02 前田 勉 夏の朝はやく

06 横山 仁 生活の柄 8

## ● エッセイ

08 片津 森 初めての奥穂高岳 (2)

13 佐藤ただし 水田とツバメ (11)

16 横山 仁 雑記 (13)

## 夏の朝はやく

前田 勉

山なみの奥から  
天空を染めあげ  
はすかいに射す光  
やや右肩後方のあたりで  
射抜き  
太古からの交わりを  
今へ  
淡い琥珀色の時間となって  
西の海に  
反射させる

限られた処から

届くもの

心覆われることなく

想い塞がれることなく

今

此処に在るもの

へと

降りそそいで

わかっている

そこにもここにもないことは

わかりはじめたつもりであった

ふりかえってはいけない

と

だれかがとおくでさげんている

やくそくされたこと

らしい

ふりかえつてはいけない  
ふりかえつてはいけない  
じゅもんのようにあたまのなかで  
ぐるぐるとめぐるせ  
ふかくもぐるようにしずんでいくのを  
こらえる

ああ

ついに

オルフェウスは

ふりむいてしまったか

たてごともひげずうたうこともできず  
わたしは  
かぞえることをやめたはずの  
じかん  
に

つかまりながら  
まだここにいる

初めて迎えた

夏の

朝はやく

庭先のヤブカンゾウの

花冠

煌めき

神々がめざめた

いちにち

が

始まる

\*オルフェウス（オルペウス）

ギリシヤ神話に登場する豎琴の名手、吟遊詩人。

## 生活の柄 8

横山 仁

つかいおわった水道の蛇口を閉める  
水はまだすこし流れている

いのちが遠くなつた老母には  
みえない

水は流れている  
洗い桶から水があふれている

いのちが近くなつた老母には  
きこえない

おもいどおりにならない身体  
の記憶では

すでに

水はとまっている  
のに

水は

超越して

## 初めての奥穂高岳（二）

片津 森

### ■三日目

周囲の物音で目が覚めた。四時過ぎだった。隣の人からいわれて窓の外を見ると、明けかかった空の闇に星が見えた。幾分ガスもかかっていた。彼が窓を開けたので冷たく清新な空気が入ってきた。名古屋から来たという人は、午前中は晴れそうだがその後はガスになるかもしれないとつぶやいた。なぜ分かるのか、天氣の読みができないから、晴れてくれさえすればいいと思った。自分と同年輩に見えるがベテランのようだ。さつき窓を開けた人は、朝食前だったが布団を畳んで身支度を済ませ、ではお先にとザックを抱いて部屋を出て行った。朝食は別に確保しているのだろう。やがて朝食の始まる五時になり、特別誘い合うということ

はなく、めいめい食堂に降りていく。並んだ皿数は昨日より少なかったが、自分には十分だった。

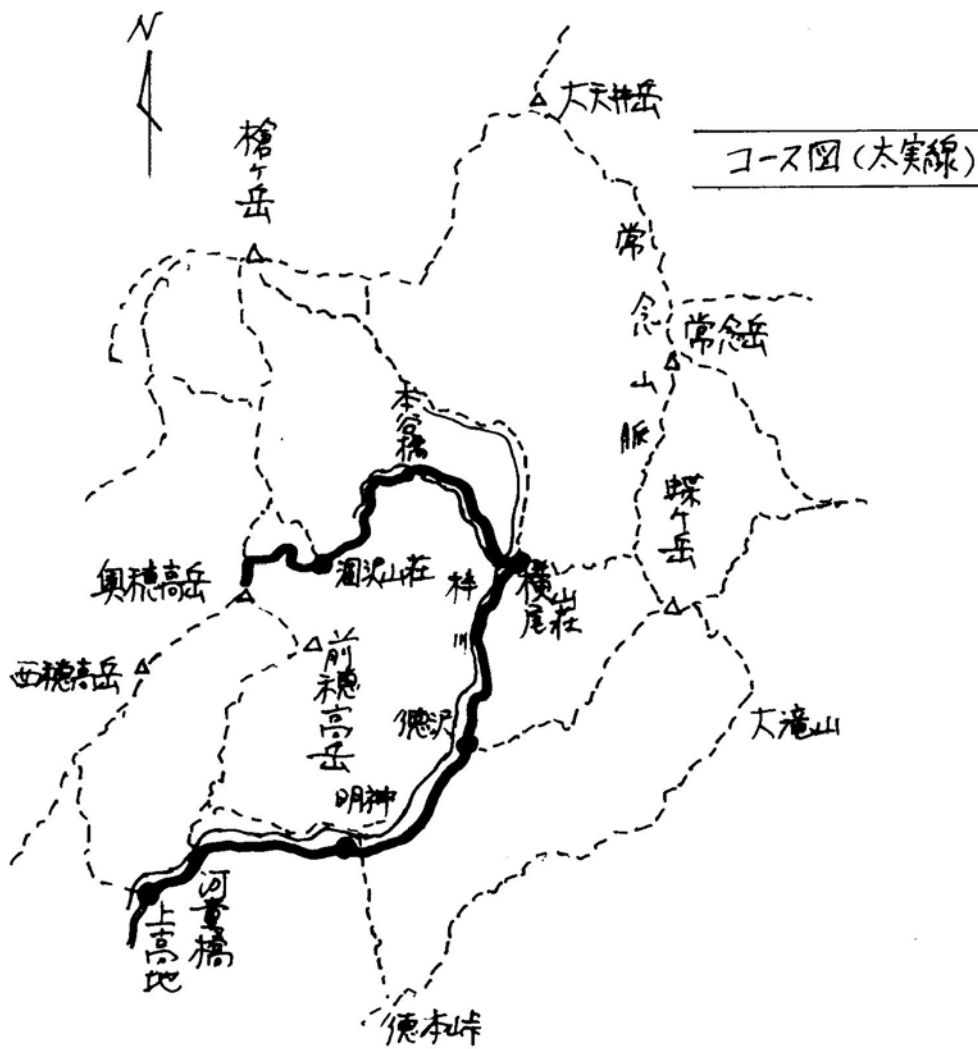
六時ちようどに出発。ヒュツテから借りたヘルメットを着けて、残雪、岩場、灌木帯の中を行く。所どころ岩に矢印や○印がついているし、また、岩を並べて路が整備されているので迷うことはない。

そして路はザイテングラート（支稜線・支尾根）の中に延び、勾配も急になって、四つん這いで登ったり、鎖場をこなしたりして高度を上げる。ゆっくり丹念にリズムを意識して登っているうちに、穂高岳山荘の屋根が見えた。

岩を積み上げた壁の内側にテラスと山荘があった。それは堅固な要塞のようだった。標高三〇〇〇メートルの岩稜の一角を拓いてこのようにするまでどれほどの長年月の強い意志と労働と知恵を要したものかと、ただただ感心するばかりだった。

山頂に向かうにはテラスの端に立ちほだかっているあの急な壁を登らなければならない。まずはその上に見えるはしご二か所に向かったが、そのはしごの前まで来ると、岩壁に垂直といつてもいいくらいの





角度で掛けられていた。まさか何かの拍子であおられて、はしごと倒れるなんてことはあるまい、などと少々スリリング。そこを越え、大体はさっきの山頂部の岩稜の右側に路がついていて、左右に曲がりながら岩場を抜けていく。路が左側にカーブした先の左の岩の間から槍ヶ岳が見えた。

少し進むと前方に十人ほどの人が群れていた。あれか。近づくとも方位盤があつてそこが奥穂山頂だと思つたが、じきにすぐ向かいに祠の置かれた岩が山頂だと分かつた。標高三一九〇メートル。九時半だつた。

ここから先に西穂高岳方面にジャンダルムが見えた。いわば命知らずの山好きがスリルを求めて通過する場所だ。その岩峰の手前の切り立つた場所に男性が一人立つていたが、よく怖くなくて立つていられるものだと感心した。手前に見えるのが前穂高岳で、路が延びている。東側の大きな山体のこちら側を、細長いガスの筋が左から右へ走るように流れていく。それが見る間に太くなり、広がつて大きなガスを連れてきたようだった。

長居は無用と下山を決めた。さつき登つたあのは

しごを今度は下るのだ。

\*

ザイテングラートの路をジグザグに下りながら、路傍の花を写真に撮つた。イワオトギリ、ハハコグサ、ハクサンフウロなど岩と岩の間に咲く花々。

急な路を下りながら、信州の作家南木佳士もこの山頂に立つたんだよな、と思ひ出した。ここに来る前にこの人の小説\*を読んだ。その中に、主人公が初めて上高地から歩き始め、途中いつ引き返してもいいつもりだったが、とうとう涸沢の山小屋まで来た。翌朝は下山するつもりだったが、朝になると山に足が向かい、ザイテングラートを登つていて、とうとう山頂まで来ていた……というのだった。

医師で作家でもある南木佳士は、うつとパニック障害に苦しみ、そこからの回復途上で登山を始めた。彼の小説やエッセイのいくつかはその登山が題材になつている。この小説では、自分が人の生き死にに関わつてきた医師であることを痛切に感じる出会いが書かれているが、終わり間近に「身の丈に不釣り合いな無理な登山はこれかぎりにして、今後は近くの山を、細

部にこだわって丁寧に歩きます、と誰にと、何にもなく許しを請うた」とか「風の弱まるのを見はからい、転落死をまぬがれることだけを念じつつ、おろおろ、おろおろと、霧の底の下山ルートをたどっていった」など、登山への殊勝な気持ちや自分の姿を幾分おどけて書いているが、これからの生き方を述べたものだと感じく。その行間からは自身へのあたたかい眼差しが感じられた。

登ったから、下山したからといって、その後が劇的に変わることなどなく、気づけば日々古くなっている。それでも、行こうと決めた山に来て、こうして歩いている自分を滅多になく新しいと感じる。それは確かにこの上なくうれしいことだった。

いまは一步一步下降するのみ。山荘から二時間かけて瀬沢ヒュッテに到着し、ヘルメットを返した。早速展望デッキでビーフカレーを注文して、これからの長い下りに備えた。さつき山頂付近ではガスが広がっていて、それは今朝、名古屋の人が予測した通りだったし、ザイテングラートを下ついているときも上にガスは見えていた。ヒュッテに着いてみると、強い日差し

がデッキを照らすようになり、手元のカレーの皿がぎらぎら反射した。

下りの路では徐々にペースが落ちてきた。前日登りの途中で「長い長い」といって年輩の男性が私のすぐ傍を下つていったが、まったくおんなじだ。本谷橋に着く前から足に疲れがきて、のろくなっている。横尾山荘には三時台に着きたいと思うが足が重い。その足を騙しつなだめつ瀬沢ヒュッテから三時間弱でようやく横尾山荘に着いた。

山荘は新しく清潔だった。お風呂ありますよと言われたときはラッキー！の気分だった。その風呂では石鹸、シャンプーは禁じられていたが、浴槽にはジェットがあつて、腰や足裏を当てて疲れを癒した。部屋は二段ベッドで八人部屋。夕食までの間はベッドで休んだ。晩飯では、隣の家族連れの主婦が私や向かいの人にもご飯、おつゆをよそってくれた。食後、山荘の名入りの手ぬぐいを買った。

#### ■四日目

朝のトイレ、使った紙は便器内に捨てず、横の容

器にいろいろ書かれていた。壁に貼られた説明書は難解だったが、バクテリアの営みで自然に返そうという仕組みではないかと勝手に憶測した。こうして自然を人の手で汚さないように、変えないようにしている。

朝食のあと前庭に出てぶらぶら歩いていると、槍ヶ岳へ向かう路を示す指導標が立っていた。昨晩夕食の席で、明日は槍ヶ岳だといっていた人は、とつくにこの路を歩いて行ったのだろう。大半の客ももう出かけたようだ。空は雲っている。少し湿った空気のなかで緑を眺めて、折角の山の朝だと思つてゆつくりすることにした。あとは平坦な路を三時間歩けば上高地だ。急ぐこともない。

山日記（平成二十九年八月）から

\*『草すべり　その他の短編』（文春文庫）所収の「穂高山」

## 水田とツバメ（一一）

佐藤 ただし

### ・農のある暮らし

八月二三日午前五時、空は少し白み、今日の始まりを告げている。ポットに入っている昨日の残り湯をコップに注ぎ、一口飲んでから作業着に着替える。

車で二分ほどの畑には、あちこちにすでに人の姿があった。足の不自由な私の母も殆ど毎朝、夜明けとともに電動カートに乗って畑に行く。今日も鋤を使って、通路の草を取っていた。青いバケツに、取った草がいっぱい入っていた。私もトマトやキュウリが毎日採れるようになってから、朝、畑に向かうのが日課になった。

ここの畑の広さは八畝（二四〇坪）程ある。そこに三〇坪のビニールハウスが二棟あり、一棟は台風でビ

ニールが破れた後、そのままにしてあり、どうにか残った一棟に自家用のトマトとキュウリ、ナス、パプリカなどを植えている。

ビニールハウス以外の畑にはネギ、ジャガイモ、カボチャ、枝豆、ダイコン、ニンジン、インゲン、ニンニクなどを作付している。数えてみると約三〇種類の野菜を作っている。

野菜の他には、アスターという花と菊が二畝植えてあった。これは仏壇に供える花で、毎年種子を買ったり、植え替えたりして育てているようだが、私の家に限らず、畑を維持してゆくことは、家の営みを維持してゆくことに結びついてるようだ。

私が畑にくるようになって、今年で三年目になるが、自分で作りたくて作付したものとしては、トウモロコシやハックルベリー、それからゴボウ、ニンニク、シヨウガ等、数種類ある。健康のためとか、体力向上のためとか、それぞれに作付した理由があり、興味をもってやっているが、今は他の作物と同様に様子を見て育てている。

元々、この畑ではナスや、ネギなどの換金作物を作

り、近くのスーパーに卸していたりしていたが、両親が年を取って体が思うように動かなくなってきたからは、自家用の野菜を作って、畑を荒らさないようにしている。

この畑について話を聞くと、私の父が若い頃というから今から五〇年位前までは、冬になると近くの雄物川の河川敷に堆積していた土をせっせと馬そりで運び、春にその土を畑全体に広げて土を肥やしていたという。この辺ではそうした土を川ゴミと呼んでいたそうだが、川の上流から流れて来て長い年月の間に堆積した肥沃な土が何層にも堆積している場所があったという。こうした取り組みを記憶していることが、田畑や祖先に対する愛着を深め、仏壇に供える花を作り続ける理由にもなっているのかと思う。

私も真似ながら畑仕事をするようになったが、野菜を育て出来たものを食べるということは、言い換えればその畑の滋養分を頂いているとも言える。客土の話などを聞くと、畑の土壌は一朝一夕には作れないということになる。その辺は頭に入れて、出来た野菜を頂くことにしている。

畑を見ていると雑草が良く生えることに驚かされる。野菜を作付している所もしていないところにもスベリヒユなどの小さい草が一斉に生えてくる。作付していない場所はトラクターで耕起してから畝を作り、雨が流れやすくしておくが、一週間もすれば小さい雑草の子供がいっぱい生えてくる。それを放置していると、土が隠れる程に成長してくる。そのため、草取りはマメにやらなくてはいけない。

草取りをしていると老子のタオという本に載っている詩を思い出す。

大きな難しさに出くわさないために

君もこの世にあつては、小さなひとつの流れだ。

タオにつながる人は、

いま自分を運んで流れてゆくエナジーを大切にする。先のことをあれこれ思つて動いたりしない。

今、できる小さなことをしてゆく。

未来の味を考えて舌なめずりしない。

大きなことを思わず、今の小さなことをしてゆく。過去の恨みを、いまの自分の小さな力で返していく。

むずかしいことだって、

小さなうちにやればやさしいんだ。

大きなことだって、小さな時には扱いやすい。

世界の大きな問題だって、みんな

小さなことからしだいに複雑になっていったんだよ。

だから、タオにつながるひとは

小さなことから少しずつ成し遂げ、

やがて、大きなものに仕上げる。

自分のエナジーを過信して安請け合いをしないことだ。

むずかしいことも、その点では、同じさ。

タオに通じたひとは、小さなことの中に、

本当の難しさを見る。だから、大きなことだからって、

難しく思わないんだよ。

草取りを面倒がって後回ししていると、手に負えなくなるということ言っているようだ。蛇足ながら、タオとは道と訳されている。

家の畑の周囲を見回してみると、手入れをしていない畑が一区画あり、セイタカアワダチソウや名前のわからない、背の高い草が腰の高さまで生い茂っている所がある。高齢になって畑作業が出来なくなり、止むを得ずそのままにしているのだろうが、それまで何代にもわたって、手入れをしてきた畑が一、二年でこうなると残念な気持ちになる。人の力を借りるなどして、少しずつでも手入れを続けてゆくことの大切さを、この畑は物語っている。

いつまで続くかわからないが、体が動くうちは農のある暮らしを続けてゆこうと思っている。

〔石破茂裏切りの歴史〕をみることができるとのこと。

## 雑記 (13)

横山 仁

さらに「秋田・こころのネットワーク」関係者によれば、必ずしもアベノミクスだけの効果ではないが、景気がよくなって、自殺する人も減少しているとのことだった。

\*

「今秋田の有効求人率1.5、これは私が経済学を学んだときに目指すべき指標で、実現不可能とさえ思われた数値です。何が実現させたのか。出すのは舌でも嫌だという財務省を抑えて、財政出動したアベノミクスの効果です。たゞ、彼をして財務省と妥協しその後の出動を止め、消費税増税という誤りを冒してしまい、現在の足踏み状態になってはいます。」

「雑記」12にいただいた感想である。分かっている人は分かっているんですね。

また、石破・野田・小泉・岸田などといった連中の経済オソチぶりについても書かれていたが、相手にする価値はないだろう。ちなみに、youtube「#102報道特注」（インターネットテレビのようなもの）では、

H氏賞受賞者一覧で見つけたのは、昭和62年、第12回の受賞者、風山稔生『大地の一隅』。以前、詩人協会の年表を補足するべく調べていて、秋田県出身ということははじめていたが、詳しいことは忘れていた。2冊の詩集も、以前調べたときは、秋田にはなかったが、いま、あきた文学資料館には、詩集『自伝のしたたり』と、風山義郎さんへのハガキがあるようだ。（風山義郎さんからの奇贈らしい）

『現代詩大事典』（三省堂、2008・2）では、次のように紹介されている。「風山稔生 かざやまのぶお 1927・4・21～ 秋田県船越町（現、男鹿市）生まれ。本名、



安田博。一九三二（昭七）年北海道弟子屈てしかがに入植。開拓民の子として育つ。旭川師範学校講習科卒。弟子屈小学校教員時代から詩作を始める。（以下略）

『日本現代詩大系』第十二巻（河出書房新社、昭和51年2月）には、「幼い者の奇跡」「讃歌・母の腰」（『大地の一隅』より）、「鷹酋長」「立産」（『自伝のしたたり』より）が掲載されている。また「悠々緩緩 月見で一杯」（sakurago.exblog.jp）というブログでは、「讃歌・母の腰」が紹介されている。リアリズムの詩で、迫力があり、圧倒される詩だ。

『日本の詩歌27（現代詩集）』（中央公論社、1979）にも、掲載されているようだ。

『時間詩集1983』にも風山瑕生さんは収録されているから、今川洋さんはしっていたかもしれないし、また米屋猛さんからは、名前を聞いたことがあったように気がする。

なお、秋田県立図書館情報班に調べてもらったが、H氏賞が決定した1962年4月28日～30日の3日間では、秋田魁新報では掲載（紹介）されていないとのことだった。

\*

先号でも秋田県現代詩人賞にふれたが、もうひとつ、せいぜい1冊の句集（何冊でもおなじことだが）をだしただけの俳人を「詩人賞」の選考委員にする必要はあったのか、という声も…。

\*

緊縮財政については、やめようかと思っていたが、「へっぴりごし」さんのブログ（<https://ameblo.jp/yamatokokoro500>）を紹介する。「へっぴりごし」さんのブログは、【ロイターWeb】初め、様々な、興味深いものを紹介してくれている。東大教授という輩は、ニトデモ、が多いんですな、官僚と同じで。

（引用開始）

「三橋貴明氏のブログより～ “人間の屑” がいるとするならば」2018年08月02日（木）

衝撃的な標題ですが、中身は全くの正論です。

(注) 吉川洋の主張 ↓ ・ (藤井聡氏ブログより)

記事より ↓ (順不同でピクテアツツ)  
あまり強い言葉を使うと、弱く見えるので嫌なの  
ですが、もし"人間の屑"という連中が存在する  
としたら、日本の緊縮財政論者、財務省やその御  
用学者たちこそが筆頭候補なのです。

吉川洋が悪質なのは、本当は「政府の負債は減ら  
す必要がない」と理解しているにも関わらず、虚  
偽の主張(注・下記)を振りまいていることです。  
何しろ、彼奴は2001年に経済財政諮問会議の  
委員になる前は、わたくしと同じことを主張して  
いました。

ちなみに、吉川が中央公論の原稿を書いたのは、  
西日本豪雨災害の「前」でした。200人以上が  
亡くなった、あの豪雨災害の映像を見てすら、吉  
川は同じことが言えるのでしょうか。

■ ■ 財政が大事だから、人が死んでも仕方ない、とい  
う論理

東京大学経済学部の名誉教授で、元日本経済学会会  
長の吉川洋氏が、中央公論の最新号で、昨今頻発する災  
害対策に国家として対応すべきだという議論に対して、  
異を唱える論考を公表した(中央公論 2018年8月号、  
20—21頁)。

その主張の要点は、本稿最後の締めくくりの、以下の  
一文に現れている。

『あれもこれもと、現在国費ベースで年6兆円の公共  
事業費を拡大することはできない。それでは「国難」  
としての自然災害を機に、「亡国」の財政破綻に陥つ  
てしまう』

つまり、吉川氏は南海トラフ地震や首都直下地震等への対策国費が拡大すれば、我が国は「財政破綻」に陥って、国が亡びる「亡国」の状態に我が国は立ち至るだろう、と主張しているわけである。

(引用終わり)

福島の前大東電原発事故で、「格納容器は壊れないシールドコンクリートは飲んでも大丈夫」といったのは、大橋弘忠（東京大学）。このときはやったのは、ハイロウズの「東大出ててもバカはバカ」で、youtubeで見ることがができる。（前にも書いたかな？）こんなもんだから、「世界の大学ランキング2018」でランクが46位に落ちるんだろ。ちなみにアジアでは、北京大学（27位）、清華大学（30位）、香港大学（40位）などがランクされている。

\*

8月4日、「もりちゃん」さんの財務省へのリツイート。

(引用開始)

>> おい財務省。さんざん不祥事を起こしておいてチ>>メた事言ってるじゃねえぞ。何が「日本の財政を家>>計に例えると」だよ。一般家庭がお金を刷れるのか。>>それ犯罪じゃねえか。もつと言えば家計に例えるなら貯蓄も計算しなきゃダメだろ。このポソツ省庁>>はマジで頭にくるわ。冗談抜きで解体しかない。

>>>財務省@MOF\_Japan

>>>【日本の財政を考える】

>>> #平成30年度予算 #財務省全15回シリーズで、>>>日本の #財政について簡単に紹介します。  
>>>本日は、第5回目「日本の財政を家計に例えると、>>>借金はいくら？」です。

(引用終わり)

「もりちゃん」さん、もういつぱつ。8月20日

(引用開始)

財務省のコツパ役人は税込よりも税率を重視します。マジです。実は財務省内では税率を上げる事が最大の功績とされます。その為なら税金が下がっても良いのです。控えめに言って「クソバカボンコツ3流省庁消費えてなくなればいいのに」です。マジです。

(引用終わり)

\*

もう一つ、「放知技」にのったもの。先の、三橋貴明氏のブログではないが、“人間の屑”関係ということで。

2018/08/11 (Sat)、【岩本沙弓】(↓2014/2/17

に放送) アメリカはなぜ消費税を許さないのか？  
米国が消費税を憎む理由【鋭い！】<https://www.youtube.com/watch?v=6g7g4k6B05A> にふれて、  
mespesadoさんはコメントしている。ちなみに岩本沙弓氏は、文春新書で『アメリカは日本の消費税を許さない』を出しているとのこと。

(引用開始)

よく日本の新規施策や新規法案がアメリカの言いなりだとか言われ続けてきたけれども、アメリカは、単に自国に消費税を導入しないだけでなく、日本の消費税の導入や引き上げにも反対してたんですね。つまり、(トランプ大統領よりずっと以前から)、日本の政策を牛耳っていたのはアメリカというよりはむしろ日本の官僚たち(特に財務官僚)だった、というわけじゃないですか。やはり、本当の反日勢力は日本の官僚制度だった???

改めて言います。財務省おそろべし。

(引用終わり)

もうひとつ、mespesadoさん。2018/08/17 (Fri)の「放知技」。長いけれども、お試しあれ。

(引用開始)

「財政規律論」がいかにナンセンスなものであるかを、ちょっと変わった角度から考えてみましょう。

では最初にクイズです。日本の財政は赤字でしょうか、黒字でしょうか？

「え、赤字に決まってるじゃん。何言ってるの?」  
と思う人がほとんどでしょう。じゃあ質問を変えます。  
給与所得が500万円で税金が50万円、消費額が  
年間400万円のサラリーマン家庭の収入と支出はそ  
れぞれいくらでしょうか？

当たり前の話ですが、収入は500万円、支出は  
400+50で450万円ですね。

では次。売り上げが100億円、法人税が10億円、  
株主配当が20億円、経営陣を含む従業員の給与が  
30億円、材料費等のコストが40億円の企業の収入  
と支出はそれぞれいくらでしょうか？

これを通常の企業会計ではなく、「企業が誰のもの  
であるか」という観点から考えてみます。これには主  
として2つの考え方があります。

一つは「①企業は株主のもの」という考え方です。  
このとき、株主にとっての収入と支出がこの企業の収  
入と支出になりますから、収入は100億円、支出は  
10+30+40で80億円となります。ですから、

その差額の20億円が企業の持ち主である株主の収益  
となり、これは株主配当の額に一致します。

もう一つの考え方は「②企業は従業員のもの」とす  
る考え方です。このとき、従業員にとつての収入と支  
出がこの企業の収入と支出になりますから、収入は同  
じく100億円ですが、支出は10+20+40で  
70億円となります。ですから、その差額の30億円  
が企業の持ち主である従業員の収益となり、これは従  
業員給与の総額と一致します。

さあ、最後は国の会計です。この国の一般会計予算  
とその実行額が100兆円、税金が50兆円であると  
します。この場合の国の収入と支出はそれぞれいくら  
でしょうか？

財務省が当然のように宣伝する会計では税収が  
50兆円、予算実行額である100兆円が支出という  
ことになり、50兆円の赤字だ、と主張されているわ  
けですが、これってそもそも国を「誰の所有物」とみ  
なした考え方なのでしょうか？国会議員ですか？それ  
とも国家公務員全員ですか？

違いますよね。だって、国会議員を含む国家公務員

の報酬は一般会計の歳出項目の一部ですから、上の考え方だと支出になっちゃいますよね？あれ？日本国の持ち主が受け取る金額が、何で支出になるんでしょうね？変ですね。それに現代の日本は民主主義の国です。国会議員は国民の代理人に過ぎず、彼らを特別扱いするのは変ですし、国家公務員だって「公僕」ですから同じことですね。

ですから、正解は、日本国の持ち主は当然に「日本国民」です。すると、一般会計予算の実行額100兆円は、それを受け取るのが日本国民である以上、これは当然に日本国の「収入」である、ということになります。

同様に、税金は日本国の持ち主である日本国民にとってでは支出ですから、この50兆円が日本国の「支出」である、ということになります。

そうなんです。日本という国家を、個人の家計や企業の会計と同じように「誰の持ち物か？」という視点で考えると、収入は100兆円、支出は50兆円で、差し引き50兆円の「黒字」である、ということになりますね。

「赤字が累積してるから日本が破綻する」なんて大ウソ。実は日本は大黒字だったのです！

じゃあ昔の高度成長期、一般会計予算より税金の方が多かった時代（通常「財政黒字」と呼ばれていた時代）は逆に赤字になるんか？と思う人がいるかもしれませんが、いえいえ、その時も日本国は「黒字」でした。なぜなら当時は企業がバンバン借金をして「信用創造」でオカネが増えていましたから、これが一般会計予算と税金の差額を上回り、この「信用創造で増えたオカネ」という「収入」があるため、やはり黒字だったんですね。ですから、高度成長期であれ、今日であれ、日本国は本当は「財政黒字」なんです。財政危機なんて、そもそも存在しません。

（引用終わり）

\*

文科省が賑やかである。

「文科省W汚職1野党2議員、悪徳コンサルと交際認める “霞が関ブローカー” 暗躍識者「解体的出直

しが必要」というのは、「タ刊フジ」2018.7.28。  
これを補足するのは、DAPPIさんのツイート。

(引用開始)

上念司 「前川喜平は天下り幹旋という法律違反をし  
本来なら懲戒解雇だったが武士の情で依頼退職にし退  
職金まで払った。それなのに逆恨みして『アベガー』  
をやっている。どうしようもない」(8月3日)

上念司 「裏口入学に関しては立憲民主党の吉田統彦  
と国民民主党の羽田雄一郎の名前が出るのにTVは  
追及しない。反安倍なら無罪なの？そういう出鱈目な  
ことをTVや新聞はやってる可能性がある」(8月3日)  
(引用終わり)

今後、テレビや新聞で取り上げられるかもしれない  
が、とりあえず現時点での情報。ちなみに、石井孝明  
さんのツイッターでは、面白い画像が掲載されている。

(引用開始)

「国民民主党の羽田雄一郎先生でしょうか。日本帝

国陸軍と同じ星マークの帽子をかぶった女性から、陳  
情を受け、英霊の慰霊について語っているようです  
ね。すばらしい愛国心です。みなさん拡散しましょう」  
(2018年8月16日)

「一発だけなら諷射かもしれない」と思いましたが、  
また谷口妻？から写真が流失してますね。羽田雄一郎  
さん。クワラ通いで女の侍らすのが好きそうですが、  
あまりにも脇が甘い。どうかした方がいいでしょう」  
(2018年8月17日)

(引用終わり)

DAPPIさんがリツイートした「ちぢれ麵」さんの  
ツイート8月30日より。

(引用開始)

【日朝7月にベトナムで極秘接触、米に伝えず】  
有本香 「ワシントンポスト。日米が連携して北朝鮮に  
対峙していく流れを壊そうとしている」

須田慎一郎 「ホワイトハウスに確認したら伝わって  
る。確認しろよ共同通信。地方紙がほとんどこの記事  
を引く。地方の人はかわいいそう」〔注、魁もだんしな〕

ある意味朝日以上にひどい  
(引用終わり)

「朝日新聞『慰安婦誤報』の謝罪記事——ネット民が暴いた姑息な“検索逃れ”」は、「デイリー新潮」2018年8月27日。「自分たちの誤報・虚報は、誰にも読ませない——こんな本音が垣間見えた」と。

## あとがき

◆同人の横山さんによると、秋田県出身者で初の日氏賞は、第12回の風山瑕生氏かざやま かせいとのこと。調べてみると5歳で家族と北海道へ転居、出身地秋田県とある。年齢はともかく“出身”に違いはない……。とすると、十田撓子氏は本県“在住者”初と書くのが正しいのか？地元紙は“本県初”とある。受賞を祝すことに違いはないが、しばしこの言い回し、定義に嵌ってしまった。(B)

◆生きているうちにこんな甲子園を見られるとは露ほども思っていなかった。金農のこと。彼らの試合には何度も快哉を上げたし、大会後の余韻も長く、秋田に住む者にとって大いに誇らしかった。どうせ1、2回戦で姿を消すだろう、などという思いを吹き飛ばしてくれたが、やる前から「どうせ」何々といって終わらせてしまう「どうせ虫」が日々巣くっていたわが身を自覚させられ、反省もさせられた。(K)

◆自慢にならないが、これまで40年以上にわたってお酒を飲み続けてきた。1本の酒ビンに入っている酒は、最初の1杯も最後の1杯も中身は変わらないはずなのに、何故かもう1杯飲みたくなる。そんな私に海市の締め切りは、ちょうど良い休肝日を与えてくれている。(T)

◆「エビデンス？ねーよそんなもん(朝日)」(netgeek)。「マスコミって、誤報などではなく『悪意を持って』情報を捏造する連中だと言うことを、何度でも言い続けよう。」(信信さんのブログ) っか〜、寅ちゃん。(J)

「海市」第13号

2018年9月13日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方